

令和2年度第1回 オーテピア高知図書館サービス計画推進委員会 議事概要

1 日時：令和2年6月12日（金）10:00～12:00

2 場所：オーテピア 4Fホール

3 出席者：[委員] 加藤勉委員、齋藤明彦委員

[オーテピア高知図書館] 山崎高知県立図書館長、森岡高知市立市民図書館長（ほか）

4 議事次第

(1) 開会

(2) 議事

① オーテピア高知図書館サービス計画の取組状況について

② 次期サービス計画策定に向けたアンケート調査について

③ その他

(3) 閉会

5 議事

(1) オーテピア高知図書館サービス計画の取組状況について [資料1～5、資料7]
事務局から説明後、委員との意見交換が行われた。

(2) 次期サービス計画策定に向けたアンケート調査について [資料6]

(3) その他

6 議事録

【委員】

・おおむね目標が達成されつつあるということは、非常に結構なことだと思う。外から見たときに、掲げた目標がクリアできたということは、自分たちの活動が順調に進んでいる、約束したことがクリアされつつあるということ。それができている、できていないによって、発言なり、今後の活動の見方が随分変わってくると思うので、その点、まずは非常によかったと思う。コロナの件については、また後で触れさせていただく。

・3ページの「ブックリストやパスファインダーの作成」では、ブックリストが30から57に増え、パスファインダーを7種類作成したとのこと。パスファインダーは、結構手のかかることもあって、なかなか前に進みにくいと思う。改善点では、連携機関と協力しあい出前図書館云々と書いてあるけれども、このことはとても大事だと思う。パスファインダーを作ることが、お互いにどういうメリットがあるかということをし、しっかり突き詰めておく。なんとなく進めると、お互いに負担感があったり、相手がやってくれると思っていたのにやってくれなかったりというようなことが出てくる。そうじゃなくて、最終的にこれを作ること、我々は相手から何をしてもらって、自分たちの事業のどの部分にこういう形でプラスになる。そして、そのプラスになるというのは、例えば、行政のなかでの評価だとか、あるいはマスコミサイドに、目の前にある事業目的のクリア以外にも大きな効果が出てくる可能性があるということも含めて、お互いに腹

落ちをしたうえで進める。例えば、10の努力が20にも30にもなって最終的にお互いに返ってくるということをどこまで腹落ちしてスタートするか、というところが一つのポイントとなってくる。図書館サイドで作ってしまったほうがスピーディーかもしれないが、将来的なことを考えると、図書館と協力した経験のある行政職員が増えてくるだとか、あるいはそういったことを県民・市民の方が知るということは、お互いに、特に図書館にとって大きな財産になってくる。ぜひそういったことも頭に入れて、優先的に進めていただきたい。

・同じような意味合いだが、次のページからの「課題解決支援サービス」について、関係機関と連携して、展示とか、セミナーや相談会とか、いろんなことをやっていくわけだが、そのようなことをする中で、例えば、ビジネスでいうと、企業で実際に働いている人たちにとって、図書館が非常にプラスになるところ、問題のクリアを可能にしてくれる場所だと肌身に感じてもらえるか。そうなることで、こういった社会で一定程度の力を持ったグループの人たちが、図書館をどう後押ししてくれるのか。私が館長になったときはそれを一番考えていた。

・今、経済が下がっている一方で大量のお金を投入しているが、どこかの時点で資金的なブレーキがかかってくるはず。その波がきたときに、図書館が削られる場所になるべきではない。図書館はその地域がいろんな意味で活性化し、新しいアイデアを作り、人とのつながりを作っていくうえで大事な機関。早いうちに足元を固めておくことが必要である。その意味で、お互いに一緒にやって本当によかった、図書館のサポートで深みのあることができたというようなことを体感してもらいたい。図書館のこの人に相談すればいろんなことが解決できた、この人は我々にとってとても頼りになると行政側から見られる人が県にも市にもほしい。

・7ページ。館内でのイベント共催依頼をすべて受けることは、業務量的にも難しいと思う。連携先に共催条件の理解を求めていく必要がある。また、対外的なアピール度が判断材料となる。世間の目が集まる、マスコミにとって画期的で面白いと思えるものであれば、多少手間をかけてでもやるべき。さらにひと手間かけることで、マスコミの興味を引くフックを作っていくことも一つのポイントかと思う。

・図書館活用講座のミニ講座、ミニデータベース講座。講座の評判がよければ、それを外に向けていかに発信していくか。「よかったです」で終わらせず、よかった点を、まだ知らない人たちにどうやって届けていくかということ。せつかくここまでやったのなら、もっと注目されるようにしてもらいたい。

・10ページの県の労働委員会の事例。これを「てこ」としてどのように使うかというのも考えていただきたい。「表彰を受けた。よかった」で終わらせず、行政のなかで分りにくい分野が、図書館と一緒にやることで大きな成果を上げたこと自体をどう「てこ」に使うのか。行政の他分野に対して、材料の一つとしてこの事例をぜひ使ってもらいたい。

・15ページのPR誌の発行。今後ティーンズ部ができると思うが、これも大変いいと思う。こういったことができれば、中学、高校の学校図書館で、その学校の図書委員や

図書館に関心のある子どもたちが、いろんな形で PR、動画やポップ作り、展示などをやっていく。これらが、学校図書館をその学校でみんなに親しまれるものにしていく。公共図書館が手を出しにくいティーンズであるが、彼らがより自由に、自分たちがやってみたいことをどんどんやってもらうことでアピールできると面白いだろうと、この分野は期待している。

・PR 誌の発行とともに、特にこの年代では SNS をどう使っていくのか。可能であれば、ティーンズ部と連携を取りながら、SNS にどういう形で情報提供していくと、一般の中高生が見てくれるということが捉まえられればいいと思う。

・17 ページ、障害者用サービス。宅配サービスの実施について、使用件数や利用冊数は、もう少し伸ばしたい。今後の改善でサービスの周知に努めるとある。このあたりについて、福祉関係の団体あるいは NPO 等はどこまで認知しているのか。団体の人たちにぜひ認知してもらい、団体を通じて利用を呼びかける流れがつかれないか。NPO 団体等の人たちは、自分たちが活動の対象としている人たちにプラスになることは、一所懸命取り組んでくださる。きっかけは行政でもいいが、NPO や各種団体の人たちに図書館サービスのよさを伝えることを一度検討したらどうか。

・19 ページの研修の実施。これもぜひ充実してほしい。あまり手をかけなくてもできることが多い。特に、高知県の場合は、県立図書館と高知市民図書館以外の図書館が非常に弱い。市町村立図書館だとか学校図書館が少しでも前に出る、積極的になってくれるよう、避けて通れないことだと思う。中堅司書が研修講師を行う機会を増やすと書いてあるが、このあたりぜひ。図書館では、数年経てば、もう研修講師をやるべきだと思う。研修講師を行うときに、当然、自分自身の勉強になる。また、正規職員の司書は、できればそれぞれの得意分野を持ってほしい。その得意分野を作っていくなかで研修講師を行うと、問題点も分かり、さらに勉強することになる。目的意識があれば、自分が研修を受けたり、他の図書館を見たりするときの見方も当然変わってくる。司書はぜひ研修講師を務め、得意分野を伸ばすようにしていただければと思う。

・20 ページ。物流便による資料の配送が 12 万冊という数字は、かなり大きい。他県ではどれぐらいか。12 万冊が物流で動くことはあるか。

【事務局】

・ない。高知県立図書館時代から協力貸出しなどの対策を熱心に行ったこともあり、多くなっている。ただ、良い面、悪い面がある。高知市を除く市町村立図書館が非常に貧弱であるため、他県では、自館で当然買うような本を物流でかなり対応している。

【委員】

・県立に限ったことだが、県立図書館は、市町村立図書館をいかにバックアップしていくか、あるいは、それ以外の大学、高校などの学校をどうバックアップしていくのかというところが、非常に大きな要素である。この数字が大きいのは、外に向かって大きな声で言っていることだと思う。全国でも相当上位にくると思う。それに気がついてない人

たちは、行政も含め多分たくさんいると思うので、気づかせてあげるべき。

・自分たちは全力でやってこれだけの数字を出している。でも、一方でもっと市町村を充実させてほしい。それは、この数字が減るという意味でなく、窓口になる市町村立図書館が利用されればもっと伸びるだろう。市町村立図書館が充実すれば、この数字がもっと伸びて、全国にもないくらい充実したコレクションになる。資料は全県に向かって出ていくものという高知モデルを作っていけるキーポイントが、この物流の数字ではないかと感じる。

【事務局】

・補足する。高知県内では珍しく、中山間部の津野町立図書館がオープンしたときに、1千万円以上の資料費をつけた。非常に珍しいことであった。当然、新しい本が豊富にあることで、町民1人当たりの貸出しも全国レベルになった。高知県全体では、全国ではるかに低いレベルであるが、県から津野町に貸し出ししている本が非常に多い。このように、図書館利用が活発になって、県からの貸出しがより増えていったという事例が実際にある。

【委員】

・可能であれば、そのことを地元新聞が特集してくれれば非常に嬉しい。何かのタイミングで実績を出せるよう、整理・準備しておくことが必要である。

・21 ページ、学校について。学校が頑張ってくれるということは、公共図書館にとっても大事なこと。何年後かに、児童・生徒がユーザーになってくれるのかどうかが大きな分岐点であり、未来のユーザーを作ることに相当の労力を使うのは大事だと思う。

・学校訪問も役に立ったと思う。校長会にも行った経験があるが、校長会は何十人対一人の状態、いろんな課が説明していく中で図書館の説明を十分に聞いてもらえない。だから、直接行くことが重要になる。学校として取り組んでいこうという気持ちに、どうやってもっていけるか。全部の学校ではなく、やる気のありそうな学校を伸ばしてみるというのもありだと思う。学校を動かして行って、成果が出てくるというところを実際に見てもらうことが、未来のユーザーを作るうえでは大事だと思う。図書館の未来のユーザーという以上に、子どもたちが本を読むこと、あるいは読みたいものは自分たちに随時与えられる、ほしいと思えば得ることができるという体験を高校卒業までにしてもらい、何かあったときにそういったものを利用できるということをインプットして、社会に出してあげたい。

・22 ページ。高知市内の県立高校、私立高校が物流サービスを利用可能になったのは結構なことである。学校司書は忙しいのに、距離が何キロ離れているからあなたのところは取りに来いということ自体が違うと思う。公立だけでなく当然、国立や私立に対してもサポートするべきだと思う。県の教育委員会、高等学校課は公立だけけれども、図書館は全市民、全県民を相手にしている。

・新型コロナウイルス感染拡大防止のための休館について、外からどう見られたか。外

から見たときに、図書館は不要不急の場所と言われることが今回一番怖かった。美術館、博物館などの同じ社会教育系の施設をイメージしていただきたい。産業・医療などのいろいろな分野で必要な情報を図書館が提供することで、県民、市民の生活を守り、地域をバックアップしていく点は、美術館、博物館とは一線を画していると思う。ただ、コロナ対策の自粛期間で言うと、全部ひっくめて同じグループの扱いにされた。図書館が閉館せず、サービスを提供することができるかもしれない。コロナ自粛の流れのなかでも、開け続けている図書館は当然ある。行政窓口はどこも閉めていない。比較したときに、図書館はどうなのか。コロナウイルス感染症の発生状況は、県や市町村によって異なるが、図書館が長期間閉館しても仕方がない、閉館していてもなんとかあったと受け止められるのは怖い。利用者と直接会わない方法による資料提供などの工夫を含め、図書館は情報提供の場所であることを守り続けている、この部分だけはなんとか頑張っ提供していると、外にどのように知ってもらうか。例年だと別の時期に行う蔵書点検をコロナの休館期間中に行ったとある。我々は見えないところでこういうこともやっているし、全部は無理でも、利用者が求める資料をできるだけ手元に届けるような工夫をしていると知ってもらう。もちろん、来館者や職員の安全を守ることは大事だとは思う。ただ一方で、行政等で開いているところと閉めているところとのバランスを考えると、図書館はどういう立ち位置をとるのか。高知の感染状況や周囲の状況により、どこまでできるか、第2波のときにどうするのかを整理していただきたい。情報を提供する姿勢をできるだけ多くの県民、市民にどのように伝えるのか。ウェブ等での情報発信を含めて図書館は頑張っている、一生懸命必要な情報を提供する努力をしてくれていると理解してもらえようようにやっていただければと思う。

【委員】

・ありがとうございました。事務局からコメントをお願いします。

【事務局】

・外からどう見られているかということ意識している。やっていることをきちんと情報発信し、オーテピアは頑張っていることを外に出さないといけない。

・コロナの関係では、オーテピアとしてできることは何なのか。「With コロナ」における情報提供の仕方、取組をどう発信していくかということ意識している。電子図書館のメールでの利用申請は、マスコミに記事にしてもらったことで件数が増えている。県内の企業が作ったコロナ感染防止対策の製品展示をしている。製品のモニタリングを職員が行い、実際に製品や販路拡大につながった事例など、メディアもうまく使いながらオーテピアが役に立ったということ企業に分かってもらう必要がある。

・学校関係について、県教委の職員でも図書館のカードを持っていない職員がたくさんいる。図書館は本を貸すだけでなく、教員の教材づくりや仕事の働き方改革にもつながることをポイントとして説明すると食いつきがよく、PRしていくことは大事だと思う。

・県の教育センターと組織としてつながろうと、研修プログラムに図書館利用について

入れてもらう調整をしている。行政の人間でさえ図書館のやっていることを知らないのだから、県民、市民には本当に届いてないと思う。メディア等の広報媒体をうまく使って図書館の有用性をPRしていくのが大切だと思う。

【委員】

・よろしいでしょうか。では、お願いします。

【事務局】

・図書館も社会のなかでの存在。今回のコロナのような非常時も含めて、情報発信が重要である。図書館を県民、市民に使っていただくことが、ある意味でいうと、社会全体のレベルを高めていくことになる。市民に間違った情報が伝わり、行政に問合せ等がきて、行政が余計なエネルギーをとられるということを防ぐことにもつながるのではないかと思う。

【委員】

・自分もかつては図書館カードを持っておらず、本は買うものだと思い込んでいた。図書館に行って宝の山だと、びっくりした。本があること自体が宝の山ではあるが、それを整理しながら、情報として提供できる機能があることを意識していなかった。だから、全然知らずに行政職員が図書館に入ってくると、逆に図書館の「お宝性」が非常によく分かると思う。

【事務局】

・本当に驚いている。

【委員】

・ぜひ、その辺のところを今までの経験を活かして上手にPRしていただきたい。

【事務局】

・以前、目黒区立図書館の職員だったが、資料費を1億円以上持っていた。区役所の職員もかなり活用していて、情報公開条例を制定するときなど、多くの本を借りていた。高知に来たときに、県立図書館が2,500万円しか資料費がなく、そのときの全国の県立図書館最低で、それが何十年と続いていることが分かった。そういう状況だったので、1億円の効果が非常に大きい。これを継続していく限りは宣伝すればどんどん利用される。

・直近の事例だが、レファレンスサービスで、昨日、難しい内容で回答できるだろうかと思った質問があったが、既に調査が終わり、回答が作成されてあって驚いた。資料費が潤沢で本を購入できているので、『業種別審査事典』や、他にも、日経とかMpacといった市場調査のデータベースで該当項目を見つけていた。資料費やデータベース代が

たくさんついており、昔だったら全くあてにできなかったことができるようになっていく。それは、ご指摘のとおりだと思う。

【委員】

・鳥取県立図書館でも、資料費を1億円持っているからこそ、ここまでの資料が並んでるんだという印象があった。それから、自分が館長になったとき、これだけあるのだったらもっと面白いものを入れられるのではないかと思った。データベースを導入したのも、私が館長になった頃だった。当時は、県立図書館がお金を出し、それを県立が使うだけでなく市町村立図書館にも貸していいか、データベースの提供会社と交渉しながら導入を検討していた。私も、高知県立図書館の資料費が2千何百万円の時代をよく知っている。オーテピアを建てるときに「とにかく5千万じゃ全然足りない。(鳥取のような) 貧乏な県でも1億出しているから1億出しましょうよ」という話もした。やはり一定程度の資料費をきちんと持っていることが必要である。さっき言われたようなビジネス関係の資料には非常に高価なものがあるが、それがあれば非常に的確なアドバイスができ、企業の方にも驚いてもらえるようなことがある。そういうことができるレベルを保つためには、一つはやはり資料費だし、一つは司書がどこまで専門的な知識を持っているか、あるいはいろいろな人たちとキャッチボールをする中で、図書館ができることに気づかせてくれるような人とのつながり、これをどこまで持っているのかということ。その二つがあって、特に地方の場合は、情報の中核としての図書館が守られていく。だから、そういったことも含めて、どうやって外の人たちにそのことを理解してもらって、今の体制や資料費を守って最大限に有効に使っていくのか。そして、使った結果をどうやってみんなに知ってもらって、やはり図書館はすごいということを理解し続けてもらうか。特に行政機関に対しては、それを徹底的にやっていくということが必要だと思う。

【委員】

・よろしいでしょうか。次の議題もあるので、簡単に私のコメントを述べさせていただきます。自分たちが行っていることを関係者、それから利用者にもきちんと理解していただくということ。これは最低条件。それから一番のポイントは、今やっていることをもう少し考えてみると、それほど労力を増やさなくてももっと効率よくできるのではないかと。これが一番のキーポイントだろうと思う。このことについては、とことん知恵を絞って考えていく必要がある。それから、もう一つ大事なこととして、ポテンシャルをどう理解をさせるかということ。図書館とは、「図書館運動」という言い方をしたことがあるが、一つの動きとしてポテンシャルを持っている。「我々はそれを示すから、あなた方がどう利用するか」ということ。そのことが、これからの方向性ではないだろうか。当然、我々のポテンシャルを上げるために研修、それから自己鍛錬、その他諸々必要だろう。これだけの予算を取った組織だから、これだけのことがまだまだある、どうしてもっと十分に利用しないのかといったアピールが、これからますます必要になるだろう。それぞれ非常に必要な指摘があったので、その点よろしくお願ひしたい。

- ・あと、欠席委員からの「戦略的に次期指標を検討する必要がある」との意見があった。おそらく後世、2020年はコロナ以後、コロナ前になるターニングポイントであったと評価される可能性が高いと思う。ということは、我々の生活、文化が変わらざるを得ない。そういう状況で、我々はそれを想定せずに作ってきた目標、計画をそのまま進めるわけにはいかないだろう。一番には、情報リテラシーの必要性が格段に高まったことがある。例えば、図書館にテレワークに関してブックリストがあるかとか、それからパスファインダーがあるか、そういったことに具体的に答えていかなければならないだろう。
- ・そのようなことで、感染対策ができるわけではないが、特段コロナだけじゃなく、パンデミック自体に対応して生活が変わる。それに応じて考えなければいけないことがある。広い意味で災害対策だが、高知県の場合はいずれくる南海トラフによる地震もあり、そういうときにも当然、文化、生活パターンが変わってしまう。そういうものに対応できるということを示さなければならない。そういうアイデアを持っていただきたい。
- ・あともう一つ、自分が大学にいる関係で思ったのは、今、子どもたちの教育のスケジュールの遅れがあり、教員もこのような時期に授業をどうしたらよいかアイデアをほしがっている。そういうときに、図書館としてどのような援助や対応ができるか。多分教員側も困っていると思う。そういうときこそ、校長会とか管理職の人に、図書館を利用すれば、例えばこんな授業ができる、オーテピア全体で考えれば、科学館もある、非常に柔軟に教育支援もできるということをアピールしてもらいたい。
- ・もう一つ重要な件が残っており、次期サービス計画に向けたアンケート調査について、第2の議題に移らせていただきたい。

【事務局】

* 議事②「次期サービス計画策定に向けたアンケート調査について」について説明

【委員】

- ・今やっていることの魅力も含めてやるのは非常にいい。県市行政職員アンケートは、図書館がやっていることを知らない人たちに、理解してもらおううえでも役立つので、特に大事だと感じる。
- ・未利用者について、例えば県とか市でモニター制度があれば、上手く利用して、可能な限りの質問をさせてもらう。本格的なものをやる前に手探りの状態でやってみる。そんなに手間はかからないこともあると思うので、考えてみたらどうか。

【委員】

- ・事務局の方、コメントございますか。

【事務局】

- ・モニター制度も視野から外れているわけではない。

【委員】

・特に未利用者調査はとても大変なので、方法論から考えていかなければいけないが、とりあえず手探りでできそうなものを一回やってみるといような感じでどうか。例えば、そういうものでも期間をおきながら調査をし、もし変化が見られたら、とりあえずとっておくのはありかと感じる。

【事務局】

・ありがとうございます。

【委員】

・よろしいでしょうか。これに関してはいろいろ考え方があると思う。
・予算、期間、その他を考えて、一番大事なのは、一体何を聞きたいのか。アンケート項目の選定と柔軟な考え方。我々がほしいことと、相手が言いたいことが言える項目内容になっているか。アンケートをやる価値は十分あるし、それから非常に先駆的なものになると思う。統計の専門家や、本当に聞くべき、聞きたい項目の選定にまず時間を割いていただきたい。
・市民図書館、県立図書館の役目に応じて、意見、考え方、希望等も聞いておく必要があると思う。
・学校図書館の担当者、それから子どもたちとの関係も考えると、聞く幅ももう一度検討しておく。幅と深さ、その両方のバランスの取れた内容の、いい意味でのアンケートになるということを目指していただきたい。
・今後の我々の計画に役に立つような、結果が出しやすい形で願います。

【事務局】

・ありがとうございます。

【委員】

・それでは、第3のその他の議題がございますので、事務局のほうからお願いをいたします。

【事務局】

・配布資料の最後。高知県内の公共図書館の現状がわかるが、すごく低い。サービス計画には数値目標もあり、県民一人辺りの貸出を4.2に増やす目標がある。オーテピアはこれでも限界まで頑張っているところがあるので、市町村ももっと頑張れるようにどういうふうにすればいいのかは、大きな課題である。実績は4.42で目標達成したが、全国が5、6ぐらいなので、実は目標数値が低かったので、まださらに伸ばさなければいけない。

・県内公立図書館の資料費で1千万を超える団体は3団体しかない。これは裏返すと伸びしろになるところでもあるので、オーデピアが伸びしろを示して実証したいと思う。梶原が新しい個性的な建物と、実際に蔵書も多く資料費もついている。

【委員】

・質問。梶原もそうだが、新しいところはポツポツとできている。この流れはまだしばらく続く可能性がありますか。

【事務局】

・ある。今、活発に準備が進められているのが佐川町。

【委員】

・新しい図書館ができてきて、実績が上がってきて、納得させられるようになると流れは変わってくるのではないか。あるいは変わってきてほしいと思う。コストをかけて人員をつけたら、実績がいくつも積みあがって、これだけの効果が出た、となるように期待しているので、県立のほうも頑張ってください。

【委員】

・よろしいでしょうか。今の指摘にもあるように、そういう活動自体を知らない自治体もあるかもしれない。本当の意味できちんと広報することが必要。そういう動きが高まれば、図書館活動全体がこういうメリットをもたらす、という形で関係者を説得する方向へ動いていただきたいと思う。

・さまざまな貴重なご意見をたくさんいただきましたので、事務局では意見を参考にし、今後の活動の指針にしていきたい。